

# 大学生の意識とマナー

武内 清

(上智大学名誉教授)

浜島 幸司

(新潟大学特任准教授)

## はじめに

大学の教員や職員が日頃学生に接して、次のように感じることはよくあるであろう。

近頃の学生のマナー（行儀、作法、礼儀）はなっていない。朝早い一時限の授業は履修しないし、一時限の授業を履修しても授業には出てこない。普段の授業には遅れてくるし、教員の講義を聞かず、授業時間は友だちとのおしゃべりタイム。注意されればやめるが、すぐ私語を再開する。女子学生は化粧にも余念がない。事務の窓口に呼び出して

も無視するし、注意すると反抗的な口をきく。学生食堂は学生が去った後、ゴミが散在している。

今の大学生は少子化社会、そして消費社会の中で、幼い頃から大事に育てられ、自分の好きなことをするわがままが許されてきた。大学も全入時代になり、学生を消費者として、その好みや欲求を大事にしてくれるので、好き放題できる。このように、消費社会でわがままに育った大学生は、自己中心的で規律を欠いた行動を取り、マナー違反は日常茶飯事であると。

しかし、このような見方は、大人の世代の一方的な見方

であったり、一部の大学生の行動の一般化であったりすることも少なくない。少し広い視野から、そして大学生の行動や意識の実態を踏まえつつ、現代の大学生のマナーの問題を考えてみたい。

## 1 時代により変わるマナーの中身

現代は、変動する社会の中で、社会的規範自体も変動している、何が正しいモラルやマナーなのかがわかりにくくなっている。

たとえば、農業を中心にした社会と工業を中心にした社会と第三次産業を中心にした消費型の社会では、社会の規範や人びとの価値観も違っている。当然そこで要求されるマナーも違っている。

農業社会や工業社会に育った大人の世代では、所属する村落や集団の成員と同じ行動をとることはきわめて大切なことである。農業社会では、隣より一日収穫が遅れただけで台風が来て収穫ゼロになることがある。工業社会では、同じ時間にベルトコンベアに乗った製品を分業で組み立てる。そこでの個人の勝手な行動は、全体の流れを中断するので御法度である。そこでは周囲と同じ行動をとり、集団の統制に従うことがきわめて大切である。それが収穫や成

果を上げ、マナーにかなう行動となる。

今の大学生は「消費社会的」時代に育ち、個性的であることがよいとされ、自己の快または不快という基準で生き、自己の利益、欲望、感性が、外部の規律や規制よりも大いに優先する、自分のしたいことをする、自分の気持ちに忠実に行動することが誠実な生き方と考えている。

現在は、農業、工業、第三次（消費）産業が混在化しており、とりわけ消費社会的要素が強まった社会の中では、以前の社会で優位だったマナーを大人が若者に押しつけても、時代遅れに成り兼ねない。今の社会にあった、合理的なマナーのあり方が探られねばならない。

## 2 大学生自身のマナー意識

いくら社会が変動しても、いつの時代にも共通して、必要なモラルやマナーとして考えられていることはある。それは人への思いやりや、公共性に関することである。

昨今の大学生のマナーに関わる意識・行動について調査データから見よう。「大学生文化研究会」（代表…武内清）が、二〇〇七年に全国の一四大学の学生に、いくつかマナー、公共性について尋ねている（図1参照）。「ゴミやカンを決められた場所に捨てている」に「そう（かなり+

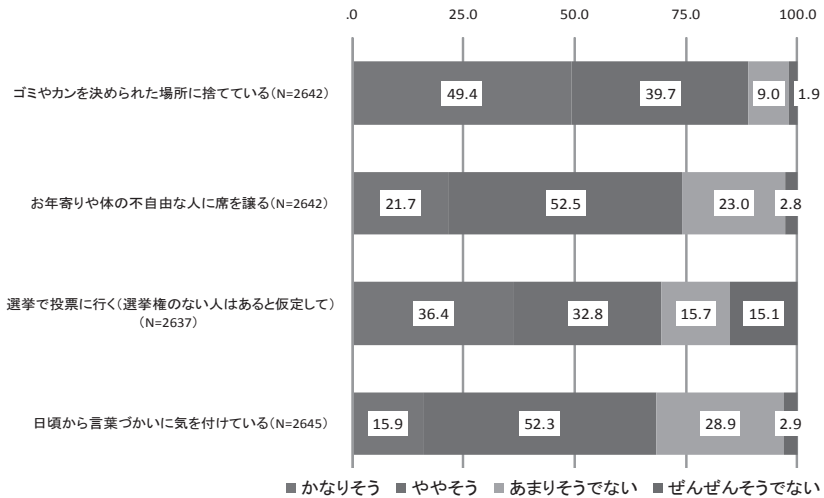


図1 大学生のマナーに関わる意識・行動 (グラフ数値は%)

やや」と答えているのは約九割である。マナーを守っているかと聞かれれば、大多数の大学生が、「守っている」と回答しているのである。

「お年寄りや体の不自由な人に席を譲る」に「そう」が七四・二%、「選挙で投票に行く」六九・二%、「日頃から言葉づかいに気を付けている」六八・二%となっている。公共性に関わる項目でも、七割以上が、肯定的に実施していると回答している。

昨今の大学生を含めた若者に対して、規範の揺らぎ、マナーの低下がマスメディア等で騒がれている。しかし、本データにあるように、当事者である大学生の意見を見れば、規範を保ちつつ、マナーも守っていることがわかる。ごく一部のマナー違反の若者や影響力のあるメディアでの印象が、若者全体へのイメージとなってしまう。一般的なイメージと異なっており、実際は、多くの若者がマナーを守った生活をしている。

七つの大学の学生に対しては、一九九七年、二〇〇三年にもマナーに関して同じ内容を質問している。大学生のモラルやマナーは、この間に向上しているのだろうか、それとも悪化しているのだろうか。各時点で男女別に分けて比較してみたところ(データは省略するが)、マナーを

守っているのは、男子学生よりも女子学生の方が多く、また三時点間で増減は、ほとんどみられなかった。ここ一〇年に限ったことではあるが、自分はマナーを守っていると大多数の大学生は思っている。

### 3 大学教員に対するマナー、授業時のマナー

今から二五年前に、大学の教師と学生との間におけるモラルとは何かを、学生に聞いたところ、次のような五つの答えが返ってきた。<sup>(2)</sup>

1 その教師の授業に積極的に出席すること、授業に出たら真面目に講義を聞くこと。

2 いくら退屈でも授業の進行を妨げるような行為をしない。教師の話を妨害するくらいなら、静かに眠ったり内職をしたりする方がよい。眠る時は席を選ぶ。内職は目立たないように後ろの席でする。

3 教師より遅れて教室に入ってはいけない。遅れた時は、堂々と入ってきてはだめ、すまなそうに入ってくる。途中で授業を放棄しない。それはデートの途中で突然恋人に黙って帰るといふ非人間的な態度に値する。

4 先生に友だち同士のような言葉を使ってはいけない。

一応敬語を使った方がよい。

5 講義内容がつまらなくても聞いているふりをする。教師のつまらない冗談にもなるべく笑うように心がける。その教師の信念に反対しない。

このように、熱心な受講態度、講義を妨げない居眠りや内職、遅刻の時の態度、敬語の使用、教師の意向の尊重といったことを四半世紀前にモラル（マナー）として、学生は挙げていた。

当時アメリカの大学生のマナーは、この日本の大学生とかなり違うというコメントをいただいた。つまり、アメリカの大学生は、遅刻してきた時は堂々と前の扉から入り、退屈な授業には抗議し、つまらない冗談にはブーイング、自分の信念と違えば教師と論争する。<sup>(3)</sup>

その後、日本の大学生の教師に対するモラル、マナーはどのように変化をしたのであろうか。かなりアメリカ化してきたように思われる。つまり、遅刻してきた時は堂々と教室に入り、出席を取らないとわかれば教室からさっさと出ていく。つまらない講義に抗議はしないものの、私語で授業の退屈を紛らわせるのは厭わない。一方、授業を熱心に聞く学生も現れ、彼（彼女）らにとっては私語をするク

ラスメイトは迷惑な存在になる。私語を教師に注意してほしいと思っている。二〇〇七年調査より、学生の声を聞く。

〈最近、大学に遊びに来ているような生徒（原文ママ）が多い。授業中にさわぐぐらいなら寝てほしい。先生も注意を与えるか、追い出してほしいです。（L大学）〉〈極端に私語の多い授業がある。学生は、もっと静かにすること。先生は、もっと注意することを行ってほしい。（L大学）〉〈授業中にうるさい学生にはもっと積極的にペナルティーを与えても良いと思います。（F大学）〉

一般に大学教師への尊敬が低くなっているとはいえず、それが地に落ちているとはいえない。少なくとも大学まで進学した若者にとって、大学の「知」（学問）への尊重の念は存在している。したがって、自分たちに「知」を伝達する授業という場は大切な場である。そこで学ぶことで、単位も与えられ、さまざまな資格や大学卒という学歴も得られる。

大学生がエリート時代の時代は、学生は自主的に学ぶことが当たり前であったが、ユニバーサル化時代の学生は、義務

として大学に進学し、学びを強制されると感じるようになってきている。大学が高校の延長として考えられ、授業にはほぼ毎回出席し、教員の話を聞き、その指示に従うものという意識を持っている。一方、消費者意識も持ち、高い授業料分の内容をそれに見合った方法で、教えられるべきという意識を持っている。学生の言い分をさらに聞こう。学生は「生徒」と自認することについて違和感がなくなりつつある。そして授業に対する不満は、まさに中学・高校時代の「生徒」のそれである。

〈自己満足の授業が多い気がします。授業をやって、お金をもらう以上、生徒が聞きやすい音量で話して下さい。興味を持たせる内容にして下さい。論点をまとめてから話して下さい。（C大学）〉〈仮にも授業料を年間五〇万以上支払っている生徒を預かっているのだから、それ相応のサービスとして、もっと幅広い生徒が理解できるような授業をすべき。教員の話すスピードが速すぎて理解しながらノートをとることができない授業するのは論外。きっちりとしてレジュメを作るなりして万が一生徒が何らかの事情で出席できないときにも授業内容を十分に理解できるようにすべき。（A大学）〉

学生たちからすれば、「わかりやすい」授業を受けることが当たり前であり、授業がわかりにくいのは、教員の講義内容や教える技術に問題があると思っっている。一方、教員側からすれば、学生の自主性のなさや勉強意欲のなさ、そして私語というマナー違反にうんざりしている。このように、授業に対する学生の意識と教員の意識にはズレがあり、お互いに不満ばかりを感じていては、平行線のまま改善がみられない。

#### 4 ローカル・ルール、マナーの取り決め

時代的な変化の中で、普遍的なマナーの共有が難しくなっている。そこで、最初に大学の当事者同士がルールやマナーの取り決めをして、それへの違反に関しては、ペナルティーを課すという方法がよくとられるようになっていく。その第一の型が、大学の罰則規定や学生へのマナーの指示である。以下は、いくつかの大学のホームページに掲載されている掲示内容を抜粋したものである。

キャンパス・ハラスメントとは、相手側の意に反する不適切な発言、行為等を行うことによって、相手側に不快感や不利益を与え、又は相手側を差別的若しくは不利益な取

扱いをすることによって相手側の人権を侵害し、教育研究・学習及び労働環境を悪化させることをいいます。キャンパス・ハラスメントには、性的な言動によるセクシュアル・ハラスメント、勉強・教育・研究に関連する言動によるアカデミック・ハラスメント、優越的地位や職務上の地位に基づく言動によるパワー・ハラスメントなどがあります。<sup>(4)</sup>

昼食時、食堂は大変混雑します。食事の済んだ学生は次の人に席を譲って、交替しながらでも誰もが着席して食事をとれるようにしましょう。とくにサークル等による席取りはただでさえ少ない席数をさらに少なくしてしまいません。<sup>(5)</sup>「自分達がよければいい」という考えはやめてください。食堂はみんなのものであります。また止むをえず食堂外に食器を持ち出した際は、所定の場所に必ず返却してください。食器が多く紛失すると、食費にはねかえるおそれがあります。食堂内は禁煙です（建物内は全面禁煙です）。

インターネットへの書き込み内容については、各自が責任を持ち厳重に注意を払うよう要請します。個人を特定できる情報の公開（特に本名）―会員制サイトやブログ等SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）にある、

日記掲載インターネットサイトへの虚偽を含む公序良俗に反する行為（飲酒運転・未成年飲酒や喫煙・不正乗車等）についての書き込み。【注意事項】たとえ冗談であつても、軽率な書き込みをすることにより学内外より厳しい批判と抗議が寄せられます。世間に対して誤解を招き、場合によっては警察の調査や法的な処分が下されることも考えられます。大学としても、事実が確認できた場合には、厳しい態度で対処する方針です。

第二の型が、授業のシラバスである。シラバスは、教師と学生の授業に関する契約である。

成績評価の方法――一、出席点、二、ほぼ毎回のレポートは採点後返却します。遅れて出したレポートは採点します。三、期末試験。一～三による総合評価。

履修上の注意――意欲・興味をもって学習して下さい。私語・飲食・帽子着用は厳禁、そして質問歓迎。レポート課題に関しては、他人のものを写すことは厳禁です。

・履修に当たつての留意点―やむを得ない理由以外での

遅刻や早退は認めない。講義中の質問は大歓迎であるが、私語は慎むこと。講義中の携帯電話の使用や飲食は厳禁である。

第三の型が、授業時のはじめに教員から学生に申し渡される要望である。たとえば、「欠席〇回以上は単位を認めない」、「飲食は禁止」、「私語禁止」等である。

これらのそれぞれの大学が提示するローカル・ルールが、大学や教員と学生との間で結ばれると、その契約違反に関しては、当事者に罰則が与えられても文句が言えない。

ただ、契約である以上、合理的で、公平なものでなくてはならない。したがって、教員側が、学問的や専門的に価値のある、あるいは学生に役立つ興味を引く内容を、工夫された上手な教え方で教えてこそ、学生にこの契約を履行するよう迫ることができる。大学のFDの重要性もここからきている。

## 5 大学職員からのマナー教育

学生にとって大学で接する社会人は、教師と職員である。教師とは授業で接することが主になるが、職員とは学事（教務）課の窓口、学生部、キャリアセンター等々の窓口で接



し、学生は履修や単位や部・サークルの活動場所の許可や就職のことで、尋ねたり、交渉したり、相談をしたりする。二〇〇七年調査では、学生の大学職員に対する満足度は決して高くない（「とても」＋「やや」満足二七・五%、「どちらともいえない」四七・三%、「とても」＋「やや」不満二五・二%）。自由記述でも不満が述べられている。

（我が大学の職員は学生をぞんざいに扱っている。（J大学））（教務課はえらそう。対応が悪すぎる。（H大学））（職員の方々の態度は、いつでもつんつんしていて学事センターに行くのをさげたいほどです。（F大学））（職員の態度を改善して下さい。学生である前に私たちはお客ですよ。（H大学））（職員（学生課等）はもつと優しく対応すべきである。（P大学））

その理由を考えると、学生は、履修漏れや単位不足、時間外の教室やグラウンド使用などで、職員から注意されることが多く、職員を煙たい存在と感じているからなのだろう。

大学職員は、教員のように表立って、学生を注意していないが、社会人として常識的な行動をとることが多い。組

織の規律を重んじ、上司の指示のもと、部・課・係員と協力して仕事をしている。授業登録・成績確認・奨学金書類といった提出手続きなどでは、職員からの厳格なチェックがなされる。それは学生からしたら、社会のルールを知る機会になる。職員は、学生に対する公平性を旨として、例外をなるべく認めないで、規則通りに履行したいと考えている。自らの都合を優先し、融通を利かせてくれないのではいかと考える学生とぶつかることになる。

職員は大学が持つ社会的責任について考え、時には「嫌われ役」を買って出ることによって、学生へしつけ（社会のマナー教育）をしているともいえる。特に、私立大学の職員は、その大学の出身者が多く、教員以上に愛校心を持ち、自分の後輩にあたる学生を、一人前の社会人に育てようという高い教育意欲を持っている場合が多い。

大学職員は、授業以外で学生に接し、社会的マナーに関しては影響力が大きい。SD活動なども通じて、学生理解を深め、学生への接し方の技法を工夫し、多くの現場で活用していく必要がある。

## 6 先輩からのマナー教育

社会常識やマナーは、フォーマルに教えられるものだけ



ではない。先輩から後輩に伝えられるものも多い。

部活・サークル、ゼミ、研究室などでは、先輩学生から後輩に独自のルールやマナーが伝承されている。「○○の場合には、××という行動をする」といったように（たとえば、指導教員の好みに反しない、目上の人には敬語を使う、一年生は早く集合して部活の準備をする、実験の後片付けは最小学年のものがする、など）、である。

それぞれの場には、伝統的に伝えられてきたローカル・ルールやマナーがあり、それへの遵守が、先輩を通して後輩に伝達される。後輩学生も先輩に盾突くことなく、その場で有利なポジションをとるために最初は違和を感じながらも従う。タテ関係が脆弱になっている現在、先輩からのルールやマナーの伝授は、効果を発揮する。

大学の部活、サークル活動では、先輩のOBが後輩に口を挟むことがよくある。現役が変えたルールに関して、自分達で作ってきたものをなくされ、悔しさを感じ、このままでは部の存続や発展が危ない、と感じつい口を出しがちである。それに対して、現役は、先輩が部活を愛しているからこそと、口出しに感謝する場合もあれば、「うざい」と反感を感じる場合もある。ここにも世代間の葛藤がある。学生たちは、葛藤を経験しながら、多様な価値観、組織を

学習していく。

## 7 学生の裏文化、マナー

青年期は、タテ関係以上にヨコ関係が重視される。親や教師の影響より仲間・友人の影響力が強い。私立大学連盟が実施した最近の学生調査によると、「悩みごとを相談する相手」は、「友人」（七七・二％）が一番で、「家族」三九・九％、「大学の教職員」四・〇％は少ない。

大学生は時間的にも、同年代の友だちと過ごす時間が長い。平均的な大学生の「キャンパス滞在時間」は一日の四分の一を大学で過ごす。大学の授業や「部・サークル活動」では、常に仲間と一緒にいる。またアルバイト、余暇など、同世代の仲間、友人と過ごす時間も長い。自然と仲間、友人からの影響を受ける。マナーに関しても、自然に同世代同士で影響しあう。

「場の空気を読む」ことに過敏な大学生が多くいる。「KY（空気が読めない）」という言葉が流行語になる。これが若者だけではなく、日常生活でも使われていることからわかるように、現代の生活は、集団の雰囲気を持つ圧力を感じたものとなっている。

学生たちは自分の属するグループの行動規範に関しては

敏感で、それをなによりも優先する。そして、仲間うちのウケを狙う、また仲間うちの規範に忠実に行動し、仲間から浮かないようにするのが、今の大学生が最も気にかけていることである。合コンに行つて、その場が盛り上がりながらかつた時、自分が異性にモテようとするよりも、飲んで酔つて皆の話題になり、場の盛り上げに貢献しようとする健全な学生もいる<sup>⑩</sup>。

大学によつて、教員が学生の教育に力を入れている大学もあれば、そうでもない（たとえば、教員の研究を優先している）大学もある。教員の教育・授業熱心の度合いに関わらず、その大学の学生の行動規範（「裏文化」）の中に勉学志向する文化があるかどうかで、学生の勉学態度は変わってくる。たとえば、「隠れマジ」（マジメであることを隠す文化）の学生文化がある大学では、休み時間に授業の予習復習など、仲間からの軽蔑した目を意識してできない。図書館、IT実習室など、立派な学生向けの施設があつたとしても、そこが利用されなければ成果にはつながらない。公的には見えにくい学生の態度を変える為には、学生の裏文化を知り、それを変えて行く必要がある。それは学生のマナーにも当てはまる。

## 8 アルバイト、インターンシップ、就活によるマナーの向上

大学以外の場所もまた、マナーを習得する機会になっている。アルバイト経験は、生活費や遊び費用の補填だけではなく、「社会勉強」や「大人社会を知る」機会となっている。社会の中で、多様な人と接しながら、仕事に責任を持たされ、その対価がアルバイト代という形で支払われる。アルバイト経験は、卒業後の職業キャリアと結び付かないという指摘もあるが、大学以外の場で社会的スキルやマナーを向上させる場面となっている。

最近では、大学もインターンシップを積極的に導入し、それをカリキュラムに位置づけ、単位を認める大学も多々見られる。企業での労働体験は、教育効果があると考えられるようになっていく。

社会を知るといふ意味では、就職活動（「就活」）も同様である。大学三年生の冬を迎えるころには、いくつかの企業へのエントリーを開始し、リクルートスーツを身にまとい、会社訪問、筆記試験、面接を繰り返す。昨今の雇用情勢の厳しさも手伝い、何社もの企業に応募する。「就活」は長期化し、企業からの内定をもらうことは難しくなつて

いる。学生たちは、エントリースートの書き方、会社訪問時のマナー、面接時の態度など、マニュアル本や先輩からの情報をもとに対策を練り、「就活」に臨んでいる。この「就活」を通じて、多くの企業人に会い、社会性やマナーを学んでいる。

「日頃から言葉づかいに気を付けている」という大学生は、二〇〇七年調査データから、一年生六五・四％、二年生六八・七％、三年生六七・七％、四年生八二・七％と、「就活」を終えた四年生に多い。このことは「就活」がマナーの学習になっていることを示している。

## 9 大学生のマナー教育について考える

以上の考察を通じて、現代の大学生の規範、ルールに対する考え方は次のようなものであることがわかる。価値が多様化している今の社会の中で、絶対的に正しい規範やマナーというものは存在しない。しかし、人と関わる中で、規範やルールがないと、どのように行動していいのかわからない。そこで、次の三つの方法で、規範やルールを設定する。

第一に、法律や学則は動かしがたいものと考え、それには従う。第二に、多くの人が守っている規範やルールに関

しては、従って当然と考える。第三に、当事者同士で決められたローカル・ルールは、守るべきものとして遵守し、ペナルティーも受け入れる。

これを前提にして、大学生の規範、マナー意識に対応した規範遵守法（マナー教育）についても考えてみよう。

第一に、大学生の法律違反や学則違反の行動もしばしば見られるが、それは学生の無知からくることが多い。それに対しては、その法律や学則をきちんと教える必要がある。「飲酒・喫煙は二〇歳から」、「カンニングや剽窃禁止規定」、「キャンパス・ハラスメント禁止規定」など、新年度のガイダンスの時に周知を徹底化する。

第二に、学内外でのマナーについて、守るべきことであると周知徹底する。「学外の路でたむろしたり、大声で騒いだりしない」、「食堂での後片付けをきちんとする」、「ゴミを所定の場所以外に捨てない」、「喫煙は所定の場所以外では行わない」、「公共の場所では携帯電話の使用をひかえる」など、学内の広報や掲示で徹底する。

第三に、授業のはじめに、受講態度の取り決めをする。「私語をしない、欠席は三回まで、違反したら受講を取り消す」、「飲食・携帯使用が見つかった場合は、速やかに教室から出て行ってもらおう」など。それに違反した学生には

その罰則を厳密に適用する。

上記のようなマナー教育は、学生の意識に対応してれば、ある程度有効に機能することであろう。しかし、問題がないわけではない。一度ルールを決めてしまうと、今度はルールに拘束されて、柔軟性がなくなってしまう。また、そのルールを作った本来の意味が失われてしまう（たとえば、「授業中の私語禁止」は授業に集中するためのものがあったのが、授業が静かであることだけが自己目的化され、居眠りおよび携帯の使用は黙認され、学ぶという授業の目的が忘れられる）。

ところで、以下の質問について、教職員や学生はどのように答えるだろうか。

質問「試験中に先生が出ていきました。あなたはどのように思いますか？」

A1 そのまま試験を受ける。カンニングはいけないことだ。

A2 当然カンニングするでしょう。先生が出ていくほうが悪い。

大学の教職員のほぼ全員、そして多くの大学生はA1の

答えを選ぶであろう。しかし、A2の考え方もあり得る。

大学全入時代になり、そのように考える大学生も現に入学している<sup>②</sup>。それは出身階層の文化の違いでもある。

現代の大学におけるモラル、マナーを考えると、A1が絶対に正しいとはいえず、A2の正当性も考慮に入れないくはならない。

このように、大学生のマナーの問題は一筋縄とはいかない。既存のマナーを守ることが大事なのではなく、大学の本来の教育目的に照らして、今の時代における大学生のマナーとは何かを考え、議論し、実践していくことが大切になっていく。

グローバル化する社会の中で、伝統的な日本（人）のマナーが、絶対的に正しく、それに倣えばいいというわけではない。マナーは相対的なものであり、時代・場所・階層、そして相手に応じて、望ましいとされる行為は大きく異なる。

社会だけでなく、大学もグローバル化している。学生時代に、知的な面でも、体験的にも、異文化に親しみながら、多様なマナーのあり方を考えることが大切である。

大学で最低限のマナーは教えていかなければならない。しかし、それ以上に、学生たち自らがマナーとは何である

## 特集・学生とマナー

かを理解し、議論し、変更し、実践していくことも大切である。

これまでの大学の持っていた自由さを活かしながら、大学のさまざまな部署、教職員が、全学的な課題として、学生に対する学習支援と同時に、マナーのあり方を考え、必要に応じて教育していくことが必要であろう。

### 〈注〉

- (1) 武内清編『大学の「教育力」育成に関する実証的研究―学生のキャンパスライフからの考察―』科研費報告書、二〇一〇年。学生コメントのアルファベットは調査大学を示している。
- A・C大学は国立大学でF・H・J・L・P大学は私立大学である。
- (2) 武内清「教師にとってはさびしい時代」『児童心理』五二号、一九八五年。
- (3) 喜多村和之『学生消費者の時代』リクルート、一九七六年。
- (4) 明治大学のホームページより  
(<http://www.meiji.ac.jp/koho/academeprofile/activity/harassment/guidelines/about.html>)【二〇一〇年九月三日閲覧】
- (5) 明治学院大学のホームページより  
(<http://www.meijigakuin.ac.jp/gakusei/manner.html>)【二〇一〇年九月三日閲覧】
- (6) 駒沢大学のホームページより  
(<http://www.komazawa-u.ac.jp/cms/manner/>)【二〇一〇年九

### 月三日】

- (7) 信州大学の理数系科目のシラバスより抜粋  
(<http://campus2.shinshu-u.ac.jp/syllabus/syllabus.dll/Display?NENDO=2010&BUKYOKU=G&CODE=01084103>)【二〇一〇年九月三日閲覧】
- (8) 山形大学の医療系科目のシラバスより抜粋  
([http://campus3.kj.yamagata-u.ac.jp/syllabus/2010/html/2010\\_09\\_78145.html](http://campus3.kj.yamagata-u.ac.jp/syllabus/2010/html/2010_09_78145.html))【二〇一〇年九月三日閲覧】
- (9) 私立大学連盟『私立大学 学生生活白書 2007』二〇〇七年。
- (10) 北村文・阿部真大『合コンの社会学』光文社新書、二〇〇七年。
- (11) 大島真夫「アルバイト」、岩田弘三「アルバイトの戦後社会小史」、武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版部、二〇〇三年。
- (12) 鷺北貴史「全入時代におけるリメディアル方法論・考」、第28回学校社会学研究会報告資料（於：放送大学）、二〇一〇年。